

バーミヤーン遺跡における考古学的新知見と文化的景観の成立

山内和也

New Archaeological Discoveries and the Formation of a Cultural Landscape at the Bamiyan Site

Kazuya YAMAUCHI

2004年6月に「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金」による「バーミヤーン遺跡保存事業」の一環としてバーミヤーン遺跡における考古学的調査が実施された。バーミヤーンではこれまで仏教石窟および壁画のみが注目されてきた。しかしながら、考古学的調査で確認された石窟群の位置や方向性、分布、そして新たに確認された古墓地の存在を検討することによって、仏教文化を含むバーミヤーンの文化や歴史を生み出した人びとの実像に迫る重要な手がかりを得ることができた。また、こうした考古学的調査および文献（玄奘、慧超）の検討を通じて、バーミヤーンの文化的景観の成立について、1つの仮説を提案した。

キーワード：石窟群、冬営地、古墓地、仏教、文化的景観

In June, 2004, an archaeological survey was carried out within the framework of the "Safeguarding of the Bamiyan Site" project funded by the UNESCO Japan Funds-in-Trust. The Bamiyan site is well known for its Buddhist caves and mural paintings. However, the examination of the locations, orientation and distribution of the cave sites, and also newly identified old cemetery sites during the survey will contribute to the future investigation of past human activities in the Bamiyan region, including the Buddhist period. In addition, through the examination and investigation of the results of the archaeological survey and texts written by Xuan Zang and Hui Chao, the author proposes a hypothesis about the creation of the cultural landscape of the Bamiyan region.

Key-words: cave sites, winter camp, cemetery sites, Buddhism, cultural landscape

はじめに

2001年3月、ターリバーン政権下でバーミヤーンの兩大仏が破壊されてから既にほぼ4年の月日が流れてしまっていたが、爆破の映像は今なお強い衝撃をもって記憶に留まっている。その後、2005年5月にユネスコとアフガニスタン情報文化省の共催で開催された「アフガニスタン文化遺産復興国際セミナー」を契機として、バーミヤーンを含めたアフガニスタンの文化遺産の復興と保護にも大きな焦点が当てられるようになった。

バーミヤーン遺跡の復興と保護に関しては、2003年から「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金」による「バーミヤーン遺跡保存事業」が進行しているが、独立行政法人文化財研究所は、その一環としてバーミヤーン遺跡の「予備的保存・活用計画案」の作成と「壁画の保存」を担当している¹⁾。考古遺跡の分布調査は「予備的保存・活用計画案」の作成の一環として2004年6月に実施されたもので、開発による破壊に晒されている遺跡の存在と位置を確認し、バーミヤーン遺跡を保護するための基礎的な情報を収集す

ることを目的とした。

分布調査の結果、新たなバーミヤーンの遺跡地図（図1、表1もあわせて参照）が作成された。1936年にフランス考古学調査団のムニエが作成して以来のものである（図2、Hackin and Carl 1933:3）。これは踏査によって新たに確認された遺跡を含むもので、今後の考古学調査の基本的な地図となるものである。

本稿では、調査によって得られた新しい知見とそれに基づくバーミヤーンにおける文化的景観の成立について述べる²⁾。

分布調査の成果

1. バーミヤーンの地勢

まずはじめに、分布調査の対象となったバーミヤーン全体の地勢について述べておくこととする。いわゆるバーミヤーン地域は、バーミヤーン谷、フォーラーディー（Foladi）谷、カクラク（Kakrak）谷の3つの谷からなっており、便宜的にこの3つの谷全体を指して、バーミヤ

表1 考古遺跡リスト

名 称	site name
ジョグラ・ヘール～ホージャ・ガール	
ジョグラ・ヘール	Jogra Khel
コリ・ムアッレム	Qol-i Mu'Allem
ザルギヤラーン	Zargaran
ダーウーティー石窟群	Da'uti Caves
ダーウーティーA窟	Cave Da-A
ホージャ・ガール	Khoja Ghar
ハワール	Khawar
キャブータク	Kabutak (Towers)
バーミヤーン大崖	
第1のストゥーパ	Old Stupa
東大仏	East Giant Buddha
西大仏	West Giant Buddha
コリ・タータール～ベイダク	
コリ・タータール	Qol-i Tatar
ソルフコル・パーイーン	Sorkhqol Pa'in
ソルフコル・バーラー	Sorkhqol Bala
サイイド・キャマルッディーン	Sayyid Kamal-ud-Din
サンギ・チャスパーン	Sang-i Chaspan
ベイダク	Beydak
ダシュティ・ムッラー・グラーム	
コリ・ダシュティ・ムッラー・グラーム	Qol-i Dasht-i Mulla Ghulam
カルティ・ソルフ	Kart-i Solh
フォーラーディー谷	
カライ・ガマイ	Qal'a-i Ghamay
サンギ・ウージ	Sang-i Uj
アーヒンガル	Ahingar
タルナーワ	Tarnawa
ゲルワーナー・バーラー	Gurwana Bala
シャフリ・ゴルゴラとその周辺	
第2のストゥーパ	New Stupa
シャフリ・ゴルゴラ	Shahr-i Gholghola
カライ・チェヘル・ドフタラーン	Qal'a-i Chehel Dokhtaran
ナウアーバード	
ナウアーバード	Nawabad
カクラク谷	
カクラク石窟群	Kakrak Caves
チャブカト	Chapqat
ハワール (望楼)	Khawar (Towers)

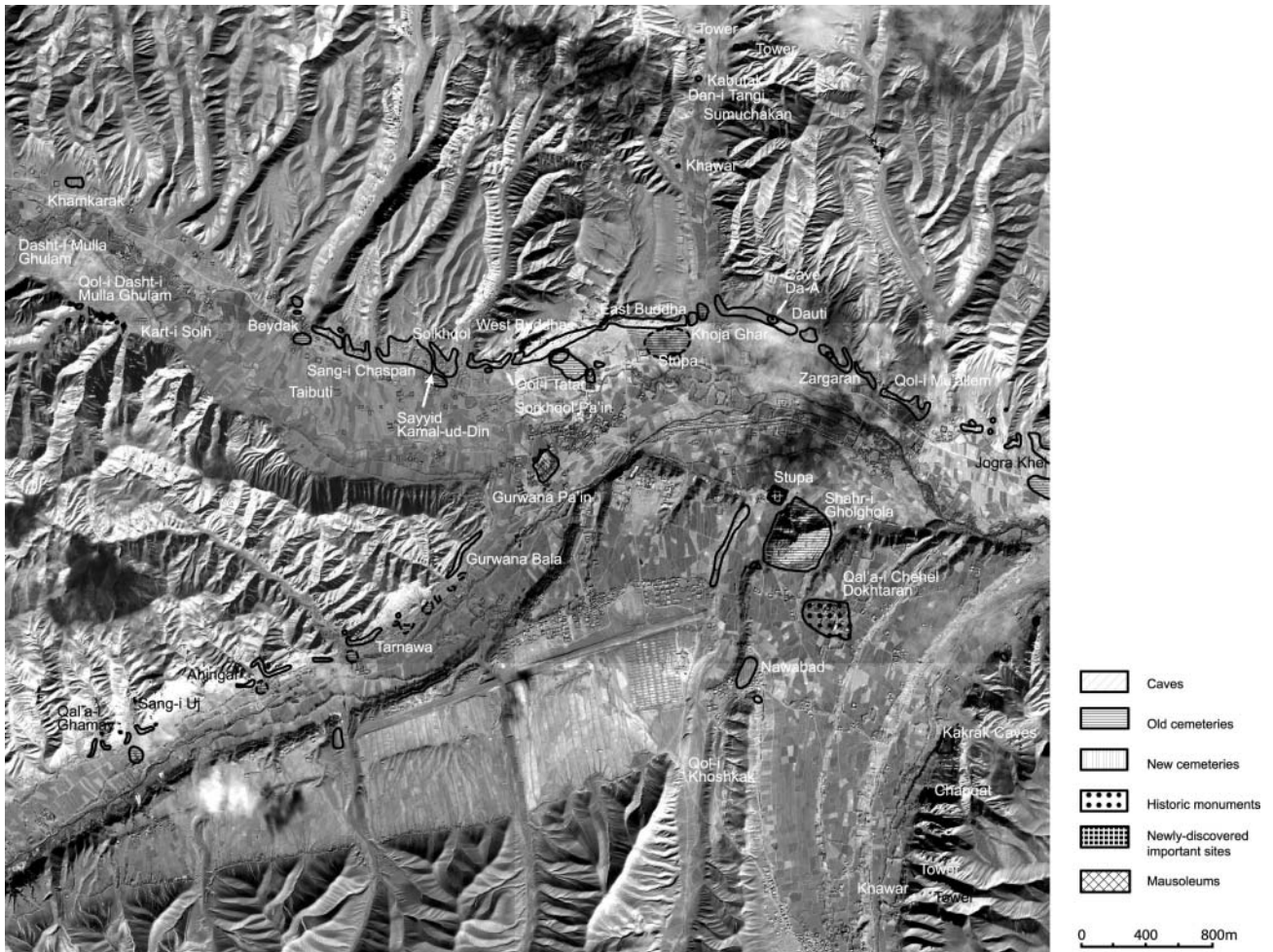


図1 パーミヤーンの考古遺跡・歴史的建造物分布図

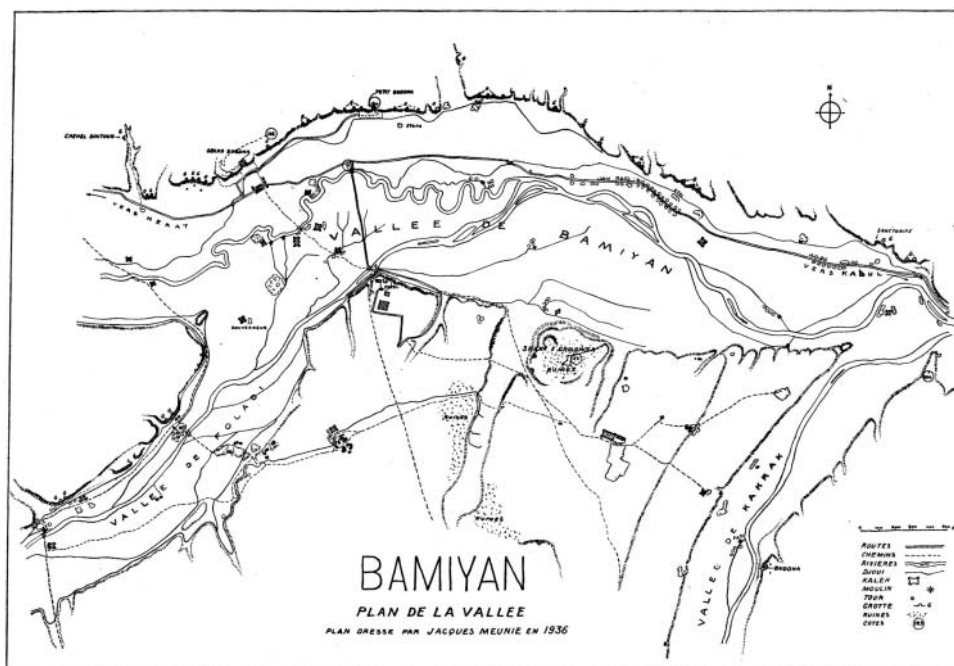


図2 ムニエ作成のパーミヤーン地図

ンと呼んでいる(図3)。各谷には、それぞれパーミヤーン川、フォーラーディー川、カクラク川と呼ばれる川が流れている。全体的には、谷の北側には水資源の乏しい山々が連なり、谷の南側にはシャー・フォーラーディー(Shah Foladi)山麓、クーヒ・バーバー(Kuh-e Baba)山麓に源を持つ川の水に支えられた緑豊かな谷が山あいには伸びている。そして、これらの谷の中に、さらに数多くの涸れ谷が存在している。ちなみに「谷」を示す語は「ダッラ(darra)」であり、「涸れ谷」を示す語は「コル(qol)」もしくは「コウル(qowl)」である。ダッラは水があって、緑が豊かで、人びとが住んでいる谷を意味しており、コルは涸れ谷であるために人間の居住には適していない、という区別がなされている。こうした谷や涸れ谷、そして川によって構成されている地形がパーミヤーンの人びとの生活を支え、また、その舞台となってきた。

629年頃にパーミヤーンを訪れた中国人求法僧玄奘は地勢について以下のように記している(桑山 1987: 19)。

「梵衍那国は東西が二千余里で南北は三百余里ある。雪山の中にある。人は山や谷に依り、地勢にしたがって住んでいる。国の大都城は崖に抱き谷を跨ぎ、長さ六、七里あり、北は高い崖を背にしている。麦はあるが、花や果実はすくない。牧畜に適し、羊や馬が多い。気候は寒さが厳しく、風俗はたけだけしい。皮や毛織物をきることが多いのもまたそこに適しているからである。」

また、726～727年頃に同じくパーミヤーンを訪れた新羅の僧慧超は以下のように記している(桑山 1998: 40-41)。

「さらにこの謝颺國より北へ七日行くと、犯引(パーミヤーン)國に達する。…土地は羊、馬、棉織物を産出し、葡萄がたいへん多い。この地は雪があり極めて寒く、たいへん山に依って住んでいる。」

この双方の記述によれば、パーミヤーンは山中にあり、冬は雪が多くて寒く、その当時から人びとは山や谷に依って住んでいたことが明らかである。これは、現在でもパーミヤーン谷に数多く存在する石窟を利用した居住形態を指すのみならず、谷、つまり川の流れに沿って帯状に広がっている耕地、そして、谷筋に沿って季節的に家畜をつれて移動する移牧といった生活形態を含めた、全体を言い表したものと考えられる。

2. 各地区の遺跡の概要

以下に、調査を行なった遺跡を地区に分けて、その概要を紹介する。

(1) ジョグラ・ヘールからホージャ・ガールまで

踏査の範囲の東端にあたるのがジョグラ・ヘール(図4、5)で、ここから西に向かって順番にコリ・ムアッレム、ザルギャラン、ダーウーティー、ホージャ・ガールが位置する。粗密の差はあるものの、これらの地点では数多くの考古学的・歴史的な石窟群および古墓地の存在が確認さ



図3 パーミヤーンとその周辺



図4 ジョグラ・ハール



図7 仏典が発見されたとされるザルギャラーンの石窟



図5 ジョグラ・ハールの古墓地

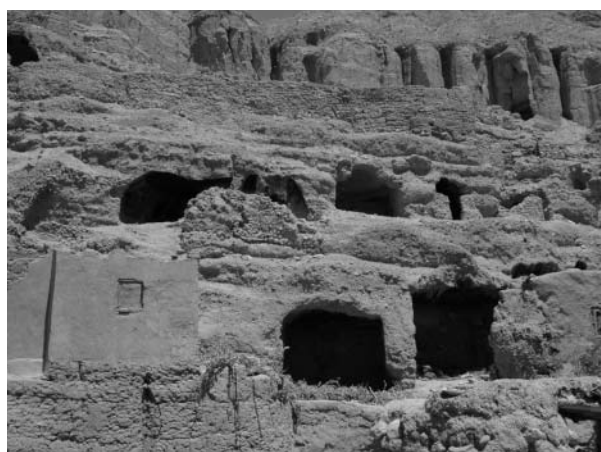


図8 ダーウーティー地区の Da-A 窟と B 窟



図6 ザルギャラーンの古墓地



図9 キャプータクの望楼

れている。

とくに注目されるのは前述のザルギャラーン地区の古墓地（図6）、そして同じくザルギャラーン地区の仏典出土推定地点（図7）、ダーウーティー地区で新たに発見され

た壁画が残された Da-A 石窟群である（図8）。なお、ホージャ・ガール涸れ谷の上流では、前述の望楼と石窟群からなるキャプータク（図9）の存在も確認されている。



図10 バーミヤーン主屋窟全景



図12 ソルフコル・パーイーン



図11 東大仏周辺全景

(2) 東大仏および西大仏を含む大崖

この地点がいわゆるバーミヤーン仏教遺跡と呼ばれている地点である(図10、11)。年代は不明なまま残されているが、5～8世紀のものと考えられている。高さ38mの東大仏、高さ55mの西大仏、数体の座仏、さらに千を越す石窟、そして相当数の優れた壁画が残されていた。しかしながら、ターリバーン政権による偶像破壊によって、両大仏をはじめとする仏教時代の遺物がほとんど破壊されてしまった。

文化財研究所とアフガニスタン情報文化省がユネスコのバーミヤーン遺跡保存事業の一環として実施した「壁画の保存」事業の過程において、仏典等の仏教時代の遺物のほかに、12世紀頃のイスラーム陶器も発見されていることから、仏教衰退後もこれらの石窟が人びとの住居として用いられていたことは明らかである。しかしながら、時期については不明であるが、崖そのもの、および石窟の崩落に伴って、しだいに放棄されていったものと推測される。

(3) コリ・タータールからベイダク

大崖の西端にはコリ・タータール涸れ谷が位置し、この

涸れ谷がいわゆるバーミヤーンの大仏および仏教石窟群の西の境界とされている。この西側、つまり大仏崖西端から西に向かって順番に、コリ・タータール、ソルフコル・パーイーン(図12)、ソルフコル・バーラー、サイイド・キヤマルッディーン、サンギ・チャスパーン、ベイダクが位置する。

この地点では、考古学的・歴史的遺構としては石窟と古墓地、および土器散布地が確認されている。現時点で確認できる石窟の数も多いが、土採りの痕跡から推測すると、以前にはさらに多くの石窟が存在していた可能性が高い。とくに石窟が集中している地点がソルフコル・パーイーン、ソルフコル・バーラー、サイイド・キヤマルッディーンである。

なお、サンギ・チャスパーン涸れ谷以西に関しては、石窟の数が急激に減少することから、少なくとも玄奘が述べる「大都城」は、少なくともここから東に向かって広がっていたものと考えることが可能である(後述参照)。

(4) ダシュティ・ムッラー・グラーム

ダシュティ・ムッラー・グラームと呼ばれる地区では、カルティ・ソルフおよびコリ・ダシュティ・ムッラー・グラームの二地点にある数基を除いて、石窟の存在は確認されなかった。この地域にある斜面は北向きであることから、居住には不向きであったものと考えられる

(5) フォーラーディー谷

フォーラーディー谷そのものは非常に奥行きが深い谷であるが、今回踏査を実施した範囲はカライ・ガマイから下流の地域である。上流のカライ・ガマイから下流に向かって、サンギ・ウージ(図13、14)、アーヒンガル(図15)、タルナーワ、グルワーナー・バーラーが位置する。カライ・ガマイからタルナーワまでは涸れ谷の入り口地点に石窟群が存在するが、グルワーナー・バーラーではフォーラーディー谷に面した比較的険しい斜面に沿って数多くの石



図 13 サンギ・ウージ (1)



図 16 シャフリ・ゴルゴラ



図 14 サンギ・ウージ (2)



図 17 新たに発見されたストゥーパ跡 (第2のストゥーパ)



図 15 アーヒンガル

窟群が確認された。また、あわせてそれぞれの石窟群と対になる古墓地も確認されている。なお、フォーラーディー仏教石窟群として知られているのは、アーヒンガルに位置する石窟群である。この地点にある涸れ谷の奥に計約 35

基の石窟があり、そのうち約 5 基の石窟に壁画が残されている。

(6) シャフリ・ゴルゴラとその周辺

「嘆きの町」と呼ばれるシャフリ・ゴルゴラは、独立した自然丘の上に建設された砦址である (図 16)。その北西側に第 2 のストゥーパが位置し (図 17)、シャフリ・ゴルゴラの対岸および南西側には数多くの石窟が確認されている。これまでシャフリ・ゴルゴラ砦址はイスラーム時代の遺跡と考えられてきたが、その傍らでストゥーパが確認されたことによってこれまでの年代観を見直す必要が生じてきた。また、北側には直線的な高まりが地表面で観察されることから、一種の「出丸」のような防御施設があった可能性もある。さらに、西側の畑地からは三足の窯道具も見つかっているという情報も得られている。シャフリ・ゴルゴラおよびその周辺に位置するカライ・チェヘル・ドフタラーン (図 18) は、これまでイスラーム時代の遺跡ということであまり注目を浴びてこなかったが、今後はその見直しを含めて、綿密な調査を行っていく必要がある³⁾。



図 18 カライ・チェヘル・ドフタラン



図 19 カクラク谷の望楼

(7) ナウアーバード

ナウアーバードはシャフリ・ゴルゴラの南、コリ・ホシユカク (Qol-i Khoshkak) とカクラク谷を隔てる尾根の北端に位置する地点で、数基の石窟が確認された。

(8) カクラク谷

カクラク谷の西側の斜面に沿って遺跡が点在する。上流からハワール、チャプガト、カクラク仏教石窟群、そしてその下流にも地名は明らかでないが、いくつか涸れ谷の入り口地点に石窟群が残されている。ハワールには2基の望楼があり、その傍らに数基からなる石窟群がある。この機能等については前述の通りである。

カクラク仏教石窟群には計81の石窟の存在が確認されており、6.7mの仏立像と壁画が残されていた。壁画はすでに剥ぎ取られ、カーブル博物館とギメ美術館に収蔵されている。仏立像については、残念ながらターリバーン政権によって完全に破壊されてしまった。なお、カクラク石窟群には計5基の望楼も確認されている (図19)。

3. 分布調査によって得られた知見

(1) 石窟群

1) 考古学的な遺跡としての石窟群

図1に示したように、バーミヤーンでは両大仏が掘り込まれている谷の北側の大崖をはじめとして崖や山腹の斜面に数多くの石窟が残されている。上述の玄奘と慧超の記述によれば、この地域においては、山腹に掘り込まれた石窟を住居として利用する生活形態は、決して仏教の導入によって開始されたものではなく、冬の寒さに適応するための、それ以前からの習慣であったものと推測される。石窟に描かれた仏教壁画の存在は、石窟の一部については仏教が繁栄していた時期に使用されていたことは明確であるが、石窟群のすべてを仏教時代に属するものと限定する必要はない。また、現在でも石窟が住居として用いられていることから、石窟群は、仏教が繁栄した時期 (紀元後5～8世紀) 以前から、現在に至るまでの長い期間にわたって使用されてきたものとするのが妥当である。それゆえ、バーミヤーンに残されている石窟群はすべて考古学的な遺跡として認識される必要がある。

2) 石窟の形状

石窟の形状は平面形に基づいて大きく4つに分類できる。つまり、平面形が、円形、八角形、正方形、長方形をなすものの4つである (図20)。天井型式もまたこうした分類に対応しており、平面形が円形、八角形、正方形の石窟の場合は、ラテルネンデッケやドーム天井の形式が見られるが、平面形が長方形の場合は、ごくわずかな例外を除けば、単純なヴォールト形式の天井である⁴⁾。

注目すべき点は、バーミヤーンの大崖およびフォーラーディー、カクラクの仏教関係の石窟群においては、平面形が長方形のものに加えて、円形、八角形、正方形のものが見られる点である。これに対して、今回の踏査によって確認された仏教壁画等が確認されていない他の大部分の石窟群においては、ほとんどすべてが、平面形が長方形をなす石窟である。これに基づけば、平面形が正方形、八角形、円形のは極めて仏教に関係の深い、言い換えれば仏教建築として導入されたものと考えられる。これに対して、平面形が長方形の石窟は、本来、住居として用いられていたものであり、それが仏教時代にも住居や僧房として用いられ、かつ、ごく最近に至るまで同じように住居として利用され続けてきたものと推定される。

3) 石窟群が営まれる斜面の向き

石窟は南東向き斜面および南向き斜面、南西向き斜面に営まれている。これは、秋から冬の時期にかけての日当たりの良さを考慮したものと考えられる。確かに、夏の一時期的における暑さは耐えがたいものであるが、標高約2500mの高地にあるバーミヤーンにおいては、冬の寒さ

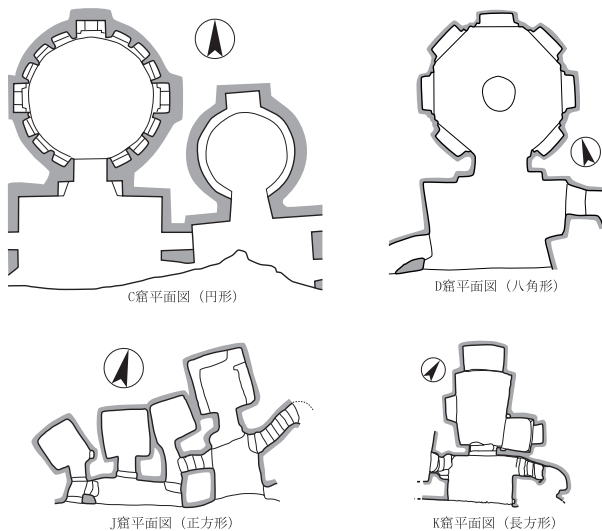


図 20 石窟の形式（平面プランによる）

への対応がより重視されていた。これは「気候は寒さが厳しく、（中略）皮や毛織物をきることが多いのもまたそこに適しているからである」という玄奘の記述からも裏付けられる。

例外的なものとしては、まず、ダシュティ・ムッラー・グラームに位置するコリ・ダシュティ・ムッラー・グラーム地点とカルティ・ソルフ地点にある石窟群が挙げられる。この地点では北に向って流れる涸れ谷の入り口に石窟が営まれている。とはいえ、数基の石窟が営まれているのみであることから、継続的な居住には不適當であったものと考えられる。また、カクラク石窟群もどちらかといえば例外的なものであり、西向き斜面に大規模な石窟群が営まれている⁵⁾。

4) 石窟群の造営される位置

基本的には、川の流れる谷に沿って、なおかつ涸れ谷の入り口（出口）地点に集中しており、涸れ谷を挟んで「八」の字形に石窟群が広がっている。涸れ谷の内部にまで石窟群が深く入り込むことはあまり一般的でないが、これは、日当たりを考慮したことと、時折発生する季節的な洪水を避けることを目的としたものであったと推測される。パーミヤーン谷の北側の斜面、つまり大崖に位置する石窟群についても、一見すると一連の続いている石窟群のようにみえるものの、詳細に分布を観察すると、一部の例外を除けば、基本的には同じように涸れ谷の入り口（出口）地点に集中していることが理解される。

涸れ谷の存在との関係で例外的として挙げられるのは、フォーラーディー谷の入り口に位置するグルワーナー・バーラー地点、シャフリ・ゴルゴラの西側対岸の地点、ザルギャラン地点、そして、東西両大仏が掘り込まれている大崖に位置する石窟群である。この4地点に関しては涸れ

谷が存在しておらず、広い谷に面して石窟群が带状に広がっているのが特徴である。

また、いわゆるフォーラーディー仏教石窟群に関しても、例外的に奥行き短い涸れ谷の奥まで仏教石窟群が伸びているが、これはカクラク仏教石窟群と同様に、居住地区というより宗教的な場として利用されたためとも考えられる。

5) 冬営地としての石窟群の分布

パーミヤーン全体を広く見た場合、石窟群の分布に関して1つの特徴が指摘できる。それは、パーミヤーンにおける石窟群は、移牧を行う人びとの冬の居住地である冬営地に当たる可能性がある、という点である。

比較的わかりやすいのはフォーラーディー谷とカクラク谷で、フォーラーディー谷ではカライ・ガマイ涸れ谷から上流、そして、カクラク谷ではハワール涸れ谷から上流には石窟は存在しない。これは、大きな谷の下流域に石窟群が存在しているということで、フォーラーディー谷とカクラク谷を移牧のための移動の経路として用いていた人びとが、谷の下流域を冬営地として利用していたことを示唆しているものと考えられる⁶⁾。

パーミヤーン谷の北側の斜面および崖に関しては、石窟群は斜面と崖に沿って東西方向に伸びているが、すでに述べたとおり、一部の例外を除いて石窟群は北側に長く伸びる涸れ谷の入り口地点に存在している。この地区の住民からの聞き取りによれば、内戦以前には夏の4ヶ月の間、北側の涸れ谷の上流域に位置する夏営地に羊や山羊を連れて移牧を行っていたことが確認されている。

したがって、パーミヤーンの住民は、冬の間に涸れ谷の入り口もしくは谷の下流域付近に居住し、短い夏の間はそれぞれの谷に沿って家畜を連れて山の上方に移動し、テントを張って数ヶ月滞在するという生活形態を有していたようである。しかしながら、引き続き戦乱によって多くの住民が難民となったことにより、こうした移牧の生活形態は失われてしまっているため、今回の調査では詳細を明らかにできなかった。この地域の住民の生活形態を明らかにすることは、石窟群の機能を明らかにする意味でも重要であることから、今後のさらなる調査が必要である。

6) 石窟群の分布から見た玄奘の「大都城」の範囲の推定

パーミヤーン大崖およびその東側および西側の石窟の分布状況が確認されたことによって、玄奘によって「長さ六、七里」と記述されている大都城の範囲を推測する手懸かりが得られる可能性がある。分布調査の成果によれば、谷の北側における石窟の集中範囲は東のザルギャラン地区から西のサンギ・チャスバーン地区に至る約4kmにある。玄奘の述べる「里」を現在の長さでいくらに設定するかは問題であるが、いずれにしてもこの範囲内に大都城が位置

していたことは明らかであろう。さらに調査を行うことによって、より正確な大都城の範囲を検討していくことが可能となる。

(2) 古墓地

1) 古墓地の存在の意義

バーミヤーンではこれまで仏教石窟および壁画のみが注目されてきており⁷⁾、住居として用いられていた石窟を除けば、その文化を生み出した人々の痕跡は確認されていなかった。古代の人々が営んだいくつかの古墓地が初めて確認されたことは、仏教文化を含むバーミヤーンの文化や歴史を生み出した人びとの実像に迫る重要な手掛かりとなる。

2) 古墓地の位置と石窟群の関係

古墓地は、涸れ谷ごとにまとまりを持つ石窟群が存在する斜面の下方、すなわち涸れ谷が形成する扇状地の扇央および扇端部分にある平坦面および緩斜面に存在している(図5、14)。その分布状況を見ると、それぞれの石窟群、つまり(冬営地の)集落に対応していることから、石窟群ごとに墓地が存在していることになり、石窟群からなる集落と墓地が一对のものとして考えられる。現時点では古墓地の年代については判断する資料が存在していないが、石窟群と対になって存在していることを考慮すれば、仏教時代以前からほぼ現在に至るまで利用されていたものと推測される。

なお、ソ連軍の侵攻、内戦勃発以後、もともといた住民が難民となっていなくなり、それに伴って新たな難民が流入しているが、これらの新しい難民の墓地は丘の上方に営まれており、古墓地を利用していない点は特記される⁸⁾。

3) ザルギャラーン地区の古墓地

最も興味深いのはザルギャラーン地区で確認された古墓地で、聞き取り調査によれば、人骨一式が壺に納められていたというものである(図6)。この埋葬形態をみれば、ゾロアスター教徒の墓と推定することが可能である。

玄奘の『大唐西域記』には「商人の往来する者にも、天神はよいしるしを現わしたり、たたりを示したりして、福德を求めさせる」という記述があるが(桑山 1987: 19-20)、この天神は東大仏の仏龕に描かれた太陽神に関係すると考えられる。ゾロアスター教徒の墓の存在が今後の調査によって確認されれば、ミスラ神(ゾロアスター教の太陽神)を中心にすえたゾロアスター教信仰が当地に存在していた可能性が高くなり、この古墓地の発見は、当時のバーミヤーンにおける人々のさまざまな信仰の実態を解明するのみならず、地元の信仰が新しく当地に進出してきた仏教に与えた影響を解明する糸口になるものと考えられる。

(3) 望楼

バーミヤーンでは、フォーラーディーおよびカクラクの

仏教石窟群を含め、すでにいくつかの望楼が確認されており、防御のための見張りの塔と考えられている(図19)。今回の遺跡踏査でもまた、カクラク谷のハワールで1基、そしてホージャ・ガール涸れ谷のキャブータク(図9)で対になる2基の望楼が確認された。この2ヵ所の望楼が興味深いのは、この望楼の外側、つまりその上流では石窟群が存在しないという点、また、望楼には数基の石窟が伴っている点、そして石窟群の集中している地点から離れた場所に孤立して存在している点である。おそらく、望楼の傍らに作られた石窟は監視兵の居住のためのものであり、一般の住居として用いられたものではないのであろう。

このようにしてみると、こうした望楼は明らかに防御的な機能を有していたものであり、バーミヤーンの中心部に近づく外来者を監視するためのものであった可能性が高い。将来的には、さらに広い範囲で調査を行うことによって、バーミヤーン全体の防衛体制、ならびにバーミヤーン王国の中心部の範囲を明らかにすることが可能となろう。

(4) 第2のストゥーパ

今回の踏査ではシャフリ・ゴルゴラ砦址の北西側にバーミヤーン谷における第2のストゥーパが存在することが確認された(図17)。ストゥーパ本体は、泥土をモルタルとした丸い川原石の石積みのもので、第1のストゥーパと同じ構築方法で作られている。平面形は24×16mの不整楕円形をなし、現存高約2.5mである。このストゥーパを囲むように方形の区画(推定範囲約100×100m)が存在することから、ストゥーパの周辺に仏教寺院が残されているものと推定される。これまで仏教時代以降のイスラム時代の遺跡として考えられていたシャフリ・ゴルゴラの傍でストゥーパの存在が確認されたことによって、シャフリ・ゴルゴラおよびその周辺地区にも仏教が繁栄していた時代の遺跡が存在している可能性が高くなった。

(5) ザルガラーン出土の仏典

ザルガラーン地区では墓地以外にも、大量の仏典が出土したとされる地点が確認されている(図7)。地元の住民によれば、10年ほど前(1993年頃)、大きな地震があり(おそらく地滑りによる石窟の崩落のことと思われる)、大量の仏典がそれとともに見つかったということである。それを拾い集めたところ、10cmほどの厚さになったという。住民はそれを燃やしてしまったとのことであるが、この顛末については、真偽のほどは不明である。

この仏典の発見と呼応するのは、現在「スコイエン・コレクション」の一部となっている、バーミヤーン出土と伝えられる仏典である(Braarvig 2000: xiii)。このバーミヤーン出土と伝えられる仏典が、まさにこのザルガラーンから出土したものであるということが確認されれば、当時のバーミヤーンで信仰されていた仏教の生の姿に迫ることが

可能となる。そういった意味でも、今後、それを確認していく作業が非常に重要である。

パーミヤーンにおける文化的景観の成立

1. 生活空間としての景観

川を流れる清流や緑豊かな谷、農耕や牧畜にいそしむ人びと、それとは対照的に水のない涸れ谷、独特の美しい色合いを持つてはいるもののまったく木の生えていない禿山、こういったものすべてがパーミヤーンに生きる人々の舞台であり、現在のパーミヤーンの景観を形作っている。

古代におけるパーミヤーンの景観が現在の景観とどのくらい違いがあったかについては、現時点では知る由もないが、少なくとも玄奘や慧超がパーミヤーンを訪れた7～8世紀には、おおむね現在見られるような景観が登場していたものと考えられる。玄奘は、パーミヤーンは「雪山の中にある。人は山や谷に依り、地勢にしたがって住んでいる。(中略) 麦はあるが、花や果実はすくない。牧畜に適し、羊や馬が多い。気候は寒さが厳しく、風俗はたけだけしい。皮や毛織物をきることが多いのもまたそこに適しているからである」と記している。慧超もまた「衣服は棉織物の上着、毛皮の外套、フェルトの上着。土地は羊、馬、棉織物を産出し、葡萄がたいへん多い。この地は雪があり極めて寒く、たいてい山に依って住んでいる」と書き残している。

こうした記述は、パーミヤーンの諸所にみられる石窟がことさら仏教石窟として掘られたものでなく、雪が降って極めて寒い冬の時期を耐え忍ぶために、この地の人びとによって住居として用いられていたことを意味している。失われた兩大仏が掘り込まれた谷の北側の大崖のみならず、日当たりの良い斜面を利用して、涸れ谷の入り口や谷の下流域に石窟が残されているのも、これを裏付けるものである。

このような住居として用いられてきた石窟および石窟群に関しては、いくつかの注目すべき点がある。現在でも涸れ谷の名称によって集落の名称が付けられるように、おそらく過去においても涸れ谷の入り口地点に営まれた石窟群が集落、もしくはある種の共同体の一つの単位をなしていた可能性がある。とすれば、石窟群と対になって存在する古墓地は、明らかに石窟群に住んでいた人びとの共同体の墓地であったはずである。つまり、涸れ谷の入り口地点に営まれた石窟群、つまり集落とその傍に営まれていた墓地が当時の人びとの生活の拠点であったのである。

次に、こうした人びとがどのような生活形態を持っていたかについて考えてみると、まず玄奘と慧超による「牧畜に適し、羊や馬を産する」という記述が注目される。ソ連軍の侵攻以前は、パーミヤーンの谷を行き交う羊飼いと家畜の群れが多く見られたという。ソ連軍の侵攻と引き続

内戦のために、人びとは戦火を逃れ、家畜を連れてこの地を去ったことによって、パーミヤーンの牧畜は決定的に衰退してしまった。しかしながら、現在でもその痕跡をわずかに残しているように、往時は、季節にしたがって家畜を移動させる移牧が盛んに行われていたようである。人びとは涸れ谷あるいは谷の下流域に位置する石窟群を、秋から初春にかけての居住地、つまり、冬営地として用い、短い夏の間は、家畜を連れて涸れ谷や谷の上流域に位置する夏営地に移動するという生活を営んでいたと考えられる。家族の成員の一部を残し、農耕に従事させ、家財を管理させる一方で、その他の家族の成員は家畜とともに季節的に移動していたのであろう。

また、玄奘と慧超は当時の人びとの生業について述べているが、その記述に違いがある点が注目される。玄奘は「麦はあるが、花や果実はすくない」と述べ、慧超は「棉織物を産出し、葡萄がたいへん多い」と記している。この差異は何に基づくものであろうか。両者によって述べられている記述における栽培作物の違いは、実は灌漑用水路の整備に起因するものである可能性がある。玄奘と慧超は、わずかに100年の差でこのパーミヤーンを訪れたわけであるが、この間に急速に水路の整備が進み、前述の移牧中心の生業形態から農耕と移牧の両者を中心とする生業形態へと変化していったのではなかろうか。こうした変化は仏教の繁栄とともにこの地にもたらされた富を背景にしたものといえるかもしれない。このような状況は対象作物を馬鈴薯に大きく変化させながらも、現在まで継続しているものと考えられる。その意味では、現在、我々が見ている水路をめぐらしたパーミヤーンの景観は、すでにこの時期に成立していたということができよう。

2. 仏教がもたらした景観

さて、パーミヤーンに登場した仏教はパーミヤーンの景観の変化にどのような影響を与えたのであろうか。

玄奘は「淳い信仰心は特に隣国よりはなほだしく、上は三宝(仏・法・僧)より下は雑多な神々に至るまでまごころをつくさないことはなく、心のかぎりになつとび敬っている。(当地の人ばかりでなく) 商人の往来する者にも、天神はよいしるしを現わしたり、たたりを示したりして、福德を求めさせる」と記している(桑山 1987: 19-20)。この記述によれば、仏教以外にも土着の宗教(天神など)が広く信仰されていたことが理解される。これはザルギャラン地区で発見されたゾロアスター教的な墓の存在からも裏付けられる。現時点では、どのようにして仏教がこの地に登場し、繁栄したのかは知る由もないが、いずれにしろ、仏教は外来の異教の一つに過ぎなかったことは明らかである。

玄奘は、バーミヤーン谷の西からやってきて、まず最初に「王城」を訪れている。そして「王城の東北の山のくまに立仏の石像（西大仏）」があったと記述していることを考えれば、「王城」を中心としたバーミヤーンの町の中心が7世紀前半、おそらくそれ以前から、西大仏の西側、石窟が集中する現在のソルフコルの付近にあったものと推定されよう。実は、バーミヤーン谷の北側の中央部に位置する大崖、つまり両大仏を含む数多の仏教遺跡が残されている部分は、険しく切り立っており、また、水源からも離れているため、決して人びとの生活に適した場所とはいえない。おそらく、この大崖の地点はいわゆる空白地点として残されていたのではなかろうか。だからこそ、この地点に仏教の中心地を作り上げることが可能であったのである。外来の異教の一つとしてこの地に登場した仏教は、いうなれば、町の中心から外れた地点を拠点とし、異なる土着の信仰を持っていた住民との軋轢を避けながら、布教を行っていったものと考えられる。その後、仏教はこの地の支配者の庇護を受けるようになり、町の中心部の傍らにも（西）大仏を造営するに至り、大崖全体が仏教の中心地となっていったのであろう。また、時代は不明であるが、後になってカクラク石窟群、フォーラーディー石窟群を中心とする地点にも、このような仏教の拠点が作られたものを推測される。また、崖に掘り込まれた大仏や座仏、石窟のみならず、伽藍や涅槃仏、そして谷を挟んで位置する二つのストゥーパ（仏塔）が、当時の谷の景観を作った要素となったことも指摘しておく。

3. 仏教衰退後の大崖周辺の景観の変化

仏教の衰退、そしてイスラーム勢力の進出とそれが景観の変化にどういった影響を与えたかについては明らかでないし、仏教の衰退がすぐさま大きな景観的变化をもたらしたかも不明である。確かに仏教の衰退によって、しだいに仏教的な要素は失われていったかもしれないが、仏教石窟を含む石窟は、少なくとも依然として人びとの住居として用いられていたのである。仏教石窟に残されていたコーランの断片や、12世紀頃のイスラーム陶器はその証拠である。しかしながら、砂岩と礫岩が層状に重なってできている軟質の岩盤に掘り込まれた石窟自体が、しだいに雨や風の影響を受けて崩落していくようになった。さらに、人びとが石窟の増改築を行ったり、砂岩を掘り取って鍋の磨き粉にしたりすることによって、石窟の崩壊の速度がさらに速められたものと考えられる。地下探査で確認されているように（山内・前田 2004）、古代の遺構を覆っている、大崖の前面に堆積する厚さ1.5～2.0mの土砂の層は、たんに大崖の後背にある山から流れ出した土砂によるものではなく、石窟、そして崖そのものの崩壊によって生じた土砂に

起因するものであろう。石窟の崩落によって、大崖はまたもや居住地点としての重要性を失うこととなったのみならず、それと同時に、その前にあったと考えられる当時の建物をもまた、地中深く埋もれさせてしまったのである。

おわりに

バーミヤーン遺跡は仏教遺跡として有名であるが、1979年以前は考古学的な発掘調査が許可されておらず、大仏や石窟内に残されていた壁画の研究が中心であったため、考古学的な調査はほとんど行われなかった。そのため、バーミヤーンの考古学的調査は決して進んでいるとはいえない状況にある。

前述のとおり、今回行なわれた考古学的調査は、遺跡の「予備的保存・活用計画案」の作成のために緊急に実施されたものであるため、期間も短く、かつ対象範囲も限定されたものであった。しかしながら、第2のストゥーパや新たな壁画といった新たな発見のみならず、谷の諸所に点在する数多くの石窟群およびそれと対になる古墓地も確認されるなど、大きな成果を得ることができた。そうした石窟群と古墓地の関係を考察することによって、バーミヤーン谷における人々の生活形態に迫る糸口を見つけることが可能となったのである。また、分布調査の成果や文献の考察をもとに、バーミヤーンにおける文化的景観の成立についても1つの仮説を提示することができたと思う。

今後は、今回の成果をもとにして、さらに範囲を広げて踏査を行なうとともに、民俗調査等を合わせて実施することによって、本稿で提示した成果を確認していく必要がある。

* 図版作成等にあたり、東京文化財研究所特別研究員である岩井俊平氏にご協力いただいたことをここに記して感謝申し上げます。

註

- 1) バーミヤーン遺跡の現状および保存に対する日本の取り組みについては、山内 2003、山内 2004a、2004b、2004c、2004d、山内・前田 2004を参照のこと。また、各国際機関および各国のバーミヤーン遺跡の保存に関する活動については独立行政法人文化財研究所編 2004を参照のこと。
- 2) バーミヤーン遺跡の文化的景観については、山内 2004eを参照。
- 3) 地元住民からの聞き取りによれば、シャフリ・ゴルゴラの西側の緩斜面では、イスラーム陶器の窯跡が見つかったとの情報も得られた。
- 4) 石窟の形状に関する調査・研究は数多いが、ここでは樋口 1984、小寺他 1971を挙げておく。石窟の平面形による分類は、すでに小寺によって行なわれているが、（小寺他 1971: 19-23）、仏教石窟の範疇における分類であり、一般住民の居住用石窟の形状との比較検討はなされていない。
- 5) カクラクおよびフォーラーディー仏教石窟群は石窟の営まれる斜面の向き、ならびに立地に関しても例外的なものに分類できる。これは、居住空間としてあまり適さない地点に新たに仏教

- 集団が進出していったことを示しているものと考えられる。
- 6) 現地での聞き取り調査によれば、カクラク谷はたんなる移牧の経路としてのみならず、パーミヤーンからベフスード、ガズニーへ抜ける山越えの経路としても用いられているとの情報が得られた。これは、慧超が「謝颶國」から「犯引國」に抜ける際にこの経路を用いた可能性もあるという点で興味深い。
- 7) パーミヤーンの壁画に関する調査に関しては枚挙にいとまがないが、代表的なものとしては Godard et al. 1928、Hackin and Carl 1933、Hackin 1959、樋口 1984、小寺他 1971、宮治 2002 を挙げておく。
- 8) 難民は別の土地から逃れてきた人びとであることから、もともとの住民が用いていた墓地の利用を避けているためであろう。

参考文献

- Braarvig, J. (ed.) 2000 *Manuscripts in the Schoyen Collection I, Buddhist Manuscripts*, Volume I. Oslo, Hermes Publishing.
- Godard, A., Godard, Y. and J. Hackin 1928 *Les Antiquités Bouddhiques de Bâmiyân*. Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan (MDAFA) tome II. Paris and Bruxelles, Les Editions G. Van Oest.
- Hackin, J. and J. Car 1933 *Nouvelles Recherches Archéologiques à Bâmiyân*. MDAFA tome III. Paris, Les Editions G. Van Oest.
- Hackin, J. 1959 *Recherches Archéologiques à Bâmiyân 1933*. In *Diverses Recherches Archéologiques en Afghanistan (1933-1940)*, 1-6. MDAFA tome VIII. Paris, Presses Universitaires de France.
- 桑山正進訳 1987『大乘仏典＜中国・日本編＞9 大唐西域記』中央公論社。
- 桑山正進編 1998『慧超往五天竺國伝研究』臨川書店。
- 樋口隆康編 1984『パーミヤーン』同朋舎。
- 小寺武久・前田耕作・宮治昭 1971『パーミヤーン - 1969 年度の調査 -』名古屋大学。
- 宮治昭 2002『パーミヤーン、遥かなり：失われた仏教美術の世界』日本放送出版協会。
- 山内和也 2003「アフガニスタン文化遺産復興支援に対する我が国の取り組みについて」『西アジア考古学』第4号 131-136 頁。
- 山内和也 2004a「アフガニスタン文化遺産復興に対する我が国の取り組みについて 2002 年 5 月～2003 年 12 月」『アフガニスタンの文化遺産の復興をめざして』81-104 頁 独立行政法人文化財研究所・東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター。
- 山内和也 2004b「アフガニスタン文化遺産復興支援に対する我が国の取り組みについて (2)」『西アジア考古学』第5号 129-131 頁。
- 山内和也 2004c「破壊された仏教遺跡パーミヤーン」『季刊民族学』110 22-29 頁。
- 山内和也 2004d「パーミヤーン遺跡保護に対する日本の貢献」『国際シンポジウム 世界遺産パーミヤーン遺跡を守る－現場からのメッセージ－予稿集』独立行政法人文化財研究所 12-13 頁。
- 山内和也 2004e「パーミアン仏教遺跡の誕生」『「オリエント」とは何か』別冊『環』⑧藤原書店 222-223 頁。
- 山内和也・前田耕作 2004「パーミヤーン遺跡保存事業」『第11回西アジア発掘調査報告会報告集』83-87 頁 日本西アジア考古学会。
- 独立行政法人文化財研究所編 2004『国際シンポジウム 世界遺産パーミヤーン遺跡を守る－現場からのメッセージ－予稿集』独立行政法人文化財研究所。

山内和也

独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所

Kazuya YAMAUCHI

Independent Administrative Institution

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo